
ずっと…

潤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ずっと…

【Nコード】

N5195N

【作者名】

潤

【あらすじ】

とあるファーストフード店。

若い2人の姿があった。

男の方の名を井上 雅といい

女の方の名を広野 滯という。

別に2人は付き合ってるわけではない。

そこで話してる内容は広野 滯が

西野 和が好きだから協力して欲しいとのことだったが…。

とあるファーストフード店。
若い2人の姿があった。

男の方の名を井上 雅といい
女の方の名を広野 濤という。

別に2人は付き合ってるわけではない。

「…」

「…」

食べることに夢中になっていた
俺は思い出したかのように
こう話しかけた。

「で、何の用で俺をわざわざ
ここまで来させたんだ？」

別に話なら明日学校でもできるだろ」

「んー別にいいじゃん。

用なくたって。

こんなに可愛い女子目の前にして
何も思わないの？」

濤が冗談交じりに聞いた。

「お前とはかれこれ小学校からの仲だ。
今更どーも思わん」

「ひどー。

まーそれはもういいわ。
聞いて欲しいのは

西野君のこと」

「和？」

あいつがどーかしたのか？」

「いや、あのね…」

「西野君って彼女いるのかな？」

「漣がモジモジしながら聞いた。」

「知るかよ。」

「そんな恋バナしねえもん」

「じゃ、普段何話してんのよ？」

「んー普段まーなんだ。」

「男子には男子の話だ」

「まさか和から漣が好きだから

協力して欲しいと毎日のように

言われてるのは言えんしな…」

「男子の話って何よ？」

「えーとだな…。」

「あー」

「なんでつまるのよ？」

「それはだなー…」

「あーあれだ。」

「アイツ意外とアニメ好きだから

その話きいてんだ」

「へえー。」

「最近ではなにがいいんだって？」

「なーんだったかな…。」

「なんか廃部寸前の軽音部に

軽音だから簡単な音楽だと思って

入った女子高校生の話とかよくされるなあ」

「タイトルは？」

「えーとなんだったけな？」

「けいおん！だったかな？」

「西田君がそんなの見てるなんて信じられない…」

「そりゃそうだろう。」

「俺の見てるやつだ、

あずにゃん可愛いしな…)

「あーあんたの趣味でしょ？」

「うげ…。」

バレたか」

「だってアンタとは小学校以来の付き合いよ。
なんだってお見通しよ」

「もう、ちよつとは協力しなさい。」

私が西野君と付き合えるように」

ブハッ。

っておい。

今こいつなんていいやがった？

和と付き合えるように

協力しろと？

ってことは何もせんでも

2人は両想いなんじゃねえかよ。

――――――――――

翌日

俺と和が話していた。

昨日のことを大方話してやった。

「ということだ。」

和。

漣に告れや」

「えー無理だよ。」

というか絶対嘘でしょー。

広野さんが僕の事好きだなんて

ましてや雅がけいおん！見てるとか」

「ホンマや。」

俺がけいおん！！！見てるのも含めてな」

「え、じゃあ雅もけいおん！見てるの？」

「！は！！！だがな」

「あーそやった。

今は2期やってるんだったー」

「そーだよなあ。

あのキャラの中で誰が一番好きなん？

俺は絶対あずにゃんだな」

「えー雅は梓派なのかあ。

唯派かと思ってた：

僕はやっぱー漣かな？」

「いや、リアルの話せえいうてへん。

けいおん！！のなかで誰が好きか…。

まさかお前、名前が一緒やから

漣のこと好きになったんやないやろうな」

「まーそれはないよ。

広野さんは可愛いし背高いし

クールだし：

…けいおん！！の漣：

でもそれはないか」

「可愛いかな？あいつがかな？

というかお前やっぱどっかで

あの漣とけいおん！！の漣被せてないかな？」

「ハハハ。

だからそれはないよ」

「じゃ、リアルにいる漣のどこを好きになったんだ？」

「そ…それは可愛いから」

「そーかいな。

ということだ。

お前はもうじきリアルで彼女が出来るかも

ってこったあ」

—————

また前回と同じファーストフード店。

俺と漣が話している。

「でーどーなのよー」

「何がだよ？」

「西野君と私が付き合えるよう協力の件」

「あー喜べ。」

なんとまーお前らは両想いだ。

とっと告るなりなんなりして

くっつけ」

「まーたあんたはふざけてるでしょー」

「ホンマや。」

俺がお前を騙したことあるか？」

「あるわよ。」

小さいときに、

角のないカブトムシ捕まえた！とかいって

私に見せたのゴキブリだったじゃないの」

「あれは…。」

俺が角のないカブトムシだと思い込んでただけだ。

別に騙したわけじゃない」

「その他にも…」

あーもう。

アンタに散々騙され続けたわよ」

「そうかあ？」

「もう思い出しただけでも腹が立つこともあるわよ」

「そんなにしてるのか、俺は…。」

すまん、漣」

「ってことは今回のも騙したんでしょ？」

「今回ばかりはマジだ」

「じゃ、私のどこが好きだって言ってたの？」

「なんかかわいいとこだとかいってぞ」

（確かにいわれてみれば

滯も少しは可愛いかな…。
ま、死んでもそんなことは
俺から言う気はないが…)

「はい。」

あんたが何か言った考えるのは
たいてい嘘。

だから今回も嘘か。

そんなに人騙して楽しい？

それならあんた詐欺師にでもなりなさいよ」

「いや、誰が犯罪者になるんだよ。

今、考えてたのは滯も

可愛いところあるなって思っただけだ」

「…」

「…」

(ってうおーい。

今、俺なんていった？

滯が可愛い？

まー確かに黙ってたら

可愛い部類に入るよな…。

じゃなくて俺はさっき

死んでも俺はそんなこと口にしないって

思ってたのにもう口にしちゃった。

ということはないんだ？

俺も実は滯のことが好きなのか？

でも滯は和のことが好き。

和も滯のことが好き…。

で、俺も滯のことが好き？

あーややこしいライティングラブじゃねえかよ。

まー一言で言えば三角関係じゃねえかよ)

「あーなんだ。」

すまん。

今回の和が滯のこと

好きなのはホントだ…」

（俺も滯が好きなんだが…。

そこは声にしないでおこう）

「…」

滯は相変わらず黙ったままだ。

「おーい。滯ー」

「何よ、アンタ。

今までなんとも思わないとかいいつつ

私のこと可愛いって思う部分があるって」

「いやまーなんだ。

男にはそういうときがあるんだ、きっと」

「何よ、アンタ。

もういい。

帰る」

っておーい滯ー。

帰るはいいが俺も同じ方向なんだが…。

広野がファーストフード店を去った後。

「…」

俺一人でなんかいるのもなあ…。

ということ帰ることにした。

信号待ちしてる滯を見つけた。

「よう」

「ふん。

何よ？」

「家ほとんど方向同じだろ？」

家まで送ってやるよ」

パラパラ

「あ、雨だ」

滯が気付いた。

「ほれ、俺のん。」

一緒に入るぞ」

素晴らしい傘―折りたたみだが―
放り投げた。

パシッ。

滯がつかんだと思ったら

そのままはじいた。

そして言い放った。

「傘いらない…。」

それと家までついてくんな。

ストーカー」

「そうかい。」

でもついていくぞ。

俺の家の方向はこっちだからな」

「何よ、私の気も知らないで」

「お前の気？」

「…」

「…」

「おーい滯なんか喋れよ。」

お前らしくないぞ」

「うっさい」

私の家ここだからバイバイ。

そういつてる滯が泣いてるように思えたのは俺だけだろうか？

――――

その後俺は…。

なんだったんだ？

滯の気持ち？

わかんねえな。

滯の部屋。

「雅のバカ…。」

ホントは西田君より雅の方が好きなの…。
それで何よ。

私のこと可愛いって

前は小学生からの付き合いだから

どーもおもわんとか言っというて

今更可愛いとかなしでしょ。

期待しちゃうじゃない…。」

雅の部屋。

「…。」

＜私の気も知らないで＞か。

まるで滯が俺のこと

好きみたいだな…

！？

でもまさかな。

滯は和が好きなはずだろ…。

というか今日滯なんか可愛かったなあ…

はあ」

時間同じくして

和も俺のいったことで

滯のことを考えていた。

「…。」

雅の言ってたことホンマかな？

…。

信じよう。

友達疑うのはよくない…。
よし。

明日告白しよう」

—————

俺はバカなことに和に

ファーストフード店であったことを話していた。

「ということなんだよ。

和。

俺には滯の気なんて

わかんねえ」

「そっかー。

というか雅から

広野さんの話題ふるのは珍しいね」

「どうかさー

昨日の滯やたら可愛くてなー。

惚れちゃった…。

お前が好きなことも知ってるのにな」

「マジでかよ？

僕今日広野さんに告ろうと

考えてたのに」

「そうか。

まー早くくつつけや。

俺もそのほうがスツとするかも知らんしな」

「それで雅はいいの？

仮に付き合ったとするよ。

手つないで…

キャハ。

恥ずかしい」

「なーに妄想で恥ずかしがってんだよ。

俺は滯が幸せならいいんだよ」

「…。」

何気にカッコいいこというね。

雅。

僕は付き合ったりしたいな。

ということだ

僕広野さんのところに行ってくるね。

告白しに…」

「広野さん！」

「はい。」

なんでしょうか？」

滯は…

はつきし言おう。

さっきまでの俺と和の会話を

聞いていた。

と、本人から後から聞いた。

「好きです。」

付き合ってください」

「…。」

ゴメン。

考えさせて」

「うん」

「いや、とりあえず視界に入らないように
してもらえるかな？」

（…。）

雅も私のこと好き。

西野君も私のこと好き…。

あーもう。

どーなってんのよ？

どうすりゃいいのよ？

誰と付き合えばいいの？

雅は私が幸せであればいいとか言ってたよな？

じゃ、雅なら幸せにしてくれるかな？

とりあえず西野君の告白だ。

振るか振らないか。

でも雅の言い方だと

西野君に私が好意寄せてるのは

知ってるみたいだし…。

なんでしゃべんのよ、あのバカ

漣が話し出した。

「ゴメン。」

好きだけどなんか

今は付き合うとかそんな気分じゃないの…」

その日の帰り道。

漣を見かけた。

「よう」

「何よ？」

「用なく話しかけちゃいけないか？」

「別にいいわよ」

「で、なんで和振ったんだ？

好きだったんだろ？」

「…。」

「アンタには関係ないでしょ」

「関係なくねえ…。」

「俺も漣が好きだ！……！！……！！……！！……！！」

「素晴らしい俺は漣を抱きしめてた。」

「…雅…」

雨が降っていた。

濡れても関係なく

俺は離さなかった。

「好きだ」

「バカ」

ホントはね

私雅がずっと好きだったの…。

ずっとずっと…」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5195n/>

ずっと…

2010年10月8日14時15分発行